

# 備後の応仁の乱

田口義之

## 大乱の原因

室町幕府の没落を決定づけた『応仁の乱』の原因は、將軍の權威の低下にある。室町幕府の全盛を築いた義満を始め、義持、義教と続く歴代將軍は、台頭する有力守護大名を或いは討ち、或いは互いに争はせてその權威を維持して来た。特に六代將軍義教は、『万人恐怖』と言われる専制政治を強行して幕府權力の確立に狂奔した。しかし、その政治は有力守護大名の反発を受け、かえって『將軍犬死』という、取り返しのつかない失態を招いてしまった。所謂『嘉吉の乱』である。

將軍の横死と、義勝、義政と続いた幼少の將軍の出現は、義満以下三代の將軍によって押さえられていた有力守護大名の台頭という、歴代將軍のもつとも恐れていた事態を招いてしまった。具体的には、『三管領・四職』家という幕府を支えた守護家の内、細川、山名兩氏のみが強大となり、他の守護家は各々兩陣營に別れて勢力を競い、それを將軍が制止しえないという深刻な状況に至るのである。そして、その權力闘争が頂点に達したのが、所謂『応仁の乱』の勃発であった。

乱の原因についてはいろいろな言われている。曰く、將軍の繼嗣問題、曰く、畠山・斯波氏の相統問題、或いは將軍義政の失政等など。しかし、その根本には將軍の權威低下を始め中世的權威の失墜という、秩序の解体現象があつたのである。そして、その結果は、幕府權力の没落という守護自身の足元を掬う事態を招き、以後百年に及んだ『戦国』の世を迎えることとなった。何故ならば、守護大名は幕府權力を背景にしてのみその領国を支配しえたのだから……。

## 宗全と是豊

大乱の前夜、備後の守護家であつた山名氏は分裂の危機に直面していた。父宗全（持豊）から備後守護職を譲られた是豊には、教豊という兄があり、山名氏の跡目継承者と目されていた。ところが、寛正元年（一四六〇）、父と衝突して播磨へ追放されてしまった。この事件で色めき立つたのが是豊である。是豊は、兄が追放されたからには、当然自分こそ山名家の跡目相統者であると考えた。しかし、『山名家督』は是豊には

回つて来なかつた。兄教豊は間もなく父宗全と和解し、その早世後、父宗全は是豊の末弟政豊（教豊の嫡子ともいう）を自分の後継者と定めたのである。

是豊は父を恨んだ。この父子の対立に目をつけたのが、当時幕府の管領として宗全と権力を争っていた細川勝元である。勝元は是豊に恩を売ることによって味方に引き入れようとした。『応仁記』には、是豊は嘉吉の乱で討ち死にした山名熙貴の遺跡を勝元の奔走によって相続したとあり、寛正五年（一四六四）には勝元の後押しで山城の守護職に補せられている。幕府のお膝元「山城国」の守護職は当時最も名譽な職とされていた。父に疎んぜられていた是豊が、この勝元の配慮に感激しない訳はない。

こうして、備後は大乱の勃発と共に、細川勝元の策謀によつて骨肉相い争うという山名氏の分裂、ひいては備後国人衆の分裂抗争という深刻な事態にたち至るのである。

## 大乱の勃発

応仁元年（一四六七）一月、京都は続々と上洛する諸国の軍勢で不気味な緊張に覆われていた。幕府を二分する実力者、細川勝元・山名宗全は、いよいよ実力行使の決意を固め、味方の諸大名に動員令を発したのである。戦端は、両陣営の支援を受けた畠山政長と同義就の間で開かれた。同年一月一八日の御霊森合戦である。しかし、この時点では細川方は動かず、戦いは山名方の支援を受けた畠山義就の勝利となつた。

本格的な衝突は、同年五月二十四日、細川方の一色義直邸攻撃によつて始まつた。西軍山名宗全の檄に応じた大名は政豊・政清・教之を初めとする山名一族、新管領斯波義廉、河内守護畠山義就、能登守護畠山義統、丹後守護一色義直以下、赤松・土岐・富樫氏等大名三〇余人、都合一万人。対する東軍細川勝元方には、成之・成春・政有を初めとする細川一族、斯波義敏、近江・出雲・飛騨守護京極持清、若狭守護武田国信、そして、山名一族の中でただ一人勝元の召しに応じた山名是豊等、総勢一六万余人（応仁記）。以後両者は、京都、否全国を舞台として、文明九年まで十一年にわたつて死力を尽くして戦うことになる。因に、「東軍」「西軍」の名は、細川方が京都室町の幕府周辺に本拠を置いたのに対し、山名方はその西に本陣（現在の西陣）を置いた事に由来し、両者の陣地の位置から東軍、西軍と呼ばれたものである。

## 備後国人衆の分裂

守護家の山名氏が分裂したため、備後の国人衆は大乱の当初より、前守護宗全に味方する者と、現守護是豊に従う者の二つに別れて、互いに争うこととなつた。現守護山名是豊に味方した者は、守護所尾道周辺の国人衆、木梨庄や高須の杉原氏一族や沼隈郡草戸の渡辺氏等ごく一部で、宮氏を始め、備北の山内首藤氏、三吉氏、和智・江田の広沢一族等、殆どの国人衆は西軍山名宗全の下知に従つた。

両者対立の構図は、一般に、「内郡衆」と「外郡衆」という、備後山間部（内郡）の国人衆と、沿岸部（外郡）の国人衆の対立抗争という図式で

が多い（『福山市史』上巻等）。しかし、有力国人衆の殆どが西軍山名宗全に味方した事は別の説明が必要である。結論を先に述べることになるが、備後に於ける「応仁の乱」は、守護に対する国人の反抗という構図で戦われたと思われる。有力国人衆の内、杉原氏一族のみが東軍方として行動しているが、これは同氏の本拠が守護所尾道に近接しており、是豊との結び付きが特に強かった為と推定される。また、草戸の渡辺氏は、この時期まだ土豪（有力名主）の範疇を出ておらず、守護の土豪に対する被官化の一例として捉えることができる。

室町期の守護と国人の関係は、常に緊張関係を孕むものであった。守護は幕府から与えられた職権によつて国人衆の被官化を押し進めていったが、それは必ずしも順調ではなかった。守護は、その領国支配の為に国人の被官化が必要であつたが、国人の側では必ずしもその必要はなかつたのである。特に有力国人は、その領域支配に守護の力を必要とせず、却つて守護の支配と対立することが多かつた。そのため彼らの中には「奉公衆」として直接将軍と結びつき、守護から独立の姿勢を示す者もいた。西軍に味方した宮氏や三吉氏はその代表である。

守護山名家の分裂は、彼ら有力国人衆に、守護に対する反抗の絶好の口実を与えた。前守護山名宗全の命を奉じることによつて、彼らは堂々と現任の守護である山名是豊と戦う事ができたのである。

## 世羅郡の戦い

東西両軍に別れた備後の国人衆は、始め両軍の招きに応じて、京畿で

戦つた。『応仁記』によると、江田・和智・山内・宮の諸氏は、大乱開始直後の応仁元年（一四六七）六月八日、宗全の招きに依つて但馬国（現兵庫県北部）に出陣し、東軍細川勝元の領国丹波（京都府北西部）に攻め入っている。また、山内氏や渡辺氏、宮氏の一族法成寺尾張守等が京都の市街戦で活躍したことが記録に残っている（山内首藤家文書・渡辺先祖覚書等）。しかし、彼らが両軍首領のため京畿で血を流したのは僅かの間であつた。戦いが長期戦になると、彼らは一早く帰国し、その最大の関心事、所領の確保・拡大を目指して狂奔することになるのである。

備後に於ける両軍の戦いは、翌応仁二年（一四六八）八月、世羅郡で幕を開けた。すなわち、『山内首藤家文書』によると、同月三日、備北山内豊成の軍勢を中心とした西軍方は、同郡小世良に侵入し、東軍方の軍勢と戦っている。

戦いは、西軍方優勢の内に推移したようである。翌文明元年（一四六九）二月、山内氏を中心とした西軍方の軍勢は大きく南下し、東軍方杉原氏の領内「杉原芋原」に侵入している（小早川家文書）。

東西両軍の合戦が先ず世羅郡で始まつた理由は、同郡の大部を占める高野山領「太田庄」がこの時期、實質的に現守護山名是豊の支配下になつたためと思われる。同庄は、応永九年（一四〇二）、山名氏の「守護請」となっており、守護山名氏にとつて備後に於ける拠点として大きな意味をもつていた。また、山内氏を中心とした西軍方の軍勢がさらに南下の姿勢を示したのは、その先に是豊の本拠、守護所尾道があつたからである。

従来、備後守護としての山名氏は、守護所を神辺城（深安郡神辺町）に

置いていたと考えられていた(福山市史上巻等)。しかし、神辺城の初見は、確実な史料の上からは戦国時代の天文年間のことであり、この説は誤りである。尾道西国寺の『再興寄付帳』によると、室町中期、同寺は守護山名持豊を初めとした山名一族の力によって再興されており、さらに、この地は高野山領太田庄の倉敷地として、前述のように応永九年以来山名氏の支配下にあった。備後に於ける山名氏の本拠は尾道であったとするのが妥当であろう。すなわち西軍方の国人衆は、是豊の守護所が置かれていたと考えられる尾道を目指して南下を繰り返したのである。

## 宮氏の向背

自身の本拠近くまで攻め込まれたのであるから、東軍方の現守護山名是豊にとってもこの西軍方の攻勢は見過ごすことはできなかった。『碧山日録』によると、応仁二年十一月、是豊は自ら備後に帰り、西軍方に立ち向かうことになる。

杉原芋原の合戦は、隣国安芸の小早川氏の加勢によって是豊方の勝利となり、翌文明元年四月には、逆に東軍方の軍勢が北上し、世羅郡重永神上で両軍の合戦が行われている。しかし、是豊の帰国には、別に大きな目的があったようである。それは西軍方に走った宮下野守の討伐である。

従来、『応仁の乱』に際して、宮下野守は東軍に属したといわれてきた。例えば『福山市史』上巻は、『応仁別記』を引いて、「宮氏では惣領宮下野守自身が是豊に従って上洛している」(P.二〇一)・「このころ(筆者注文明二年十月)山名是豊は宮下野守など備後の東軍を率いて近畿地方を転戦し

ており、摂津の兵庫をとり、ついで山崎を占領して天王山に山城をつくり、ここを本拠に淀・鳥羽・八幡の要衝を押さえていた。」と述べている。

しかし、同書が根拠としている『応仁別記』の記事には脱漏があると考えられ、到底証拠になり得ない。宮下野守の名が現れるのは、同書文明元年七月十三日の、西軍大内政弘が摂津池田筑後守を責めた記事の後で、本文は左のとおりである。

「山名弾正是豊、備後国宮下野守ヲ責手二遣、悉打順ケレハ、打テ上ラレ、兵庫へ切上ラレケリ(下略)」

『福山市史』上巻などは、この記述の中で是豊が「備後国宮下野守ヲ責手二遣」をもって宮氏の惣領家が東軍山名是豊に味方した論拠としている。しかし、では是豊は何処に宮下野守を遣わしたのか、もし池田筑後守の救援に派遣したのであれば、相手は大内政弘になるが他の史料からそれを確認することはできない。さらには是豊はどこからどこへ「打テ上ラレ」たのか、摂津池田城から兵庫へ「切上ラレ」とはどういうことか、などなど理解に苦しむのである。

それよりも、宮氏の向背については『重編応仁記』六、摂津合戦の次の記述を採った方が良いのではあるまいか。

「其頃東軍山名弾正是豊、備後国ノ住人宮下野守退治ノ為、彼国ニ馳下リ、宮ヲ打從へ帰洛スル折ナレバ其儘摂州ノ兵庫二陣ス(下略)」

宮下野守が西軍に応じたことは、別の史料からも裏付けられる。すなわち、『応仁記』巻二、室町幸幸之事によれば、応仁元年八月、室町御所に詰める奉公衆の内十二名の者が西軍方に内通し、東軍細川勝元の要

請により御所から放逐されるという事件があったが、この十二名の中に宮下野守、同若狭守の名もあつたのである。

これらのことから、『福山市史』上巻が論拠とする「応仁別記」には脱漏があることは明らかで、応仁の乱に際して、宮下野守は西軍方に味方したとするのが歴史的事実と思われる。

## 是豊の入国

この是豊の反撃は、一応功を奏したようである。先に述べたように、西軍方の南下は阻止され、翌文明元年四月には、東軍方が逆に北上し重永神上（世羅郡世羅町）で西軍と戦っているからである。

しかし、是豊が同年十月西上すると、たちまち西軍方の反撃が始まつた。西軍の総帥山名宗全は、備後に自己の腹心宮田備後守教言を「守護代」として送り込み、是豊勢力の撲滅を謀るのである。

宮田教言は、同年十二月には備後に入国し、備北山内氏の拠点甲山城（庄原市本郷）を本拠として活動を開始した。今日、教言の行動を具体的に示す記録は殆どのこつていないが、翌文明二年三月には、西軍蜂起の動きが京都に報ぜられており、同年夏頃にはその活動も一応の成果を挙げたようで、同月二十四日、山名宗全は山内豊成に宛て「今に於いては外郡の儀も悉く落居したようで誠に目出度い」と申し送っている（『山内首藤家文書』一二四号）。

これに対して是豊は、東軍方の有力武将として畿内を転戦していたが、領国備後の西軍方の動きを黙視することは出来ず、同年暮れ帰国を決意

した。是豊にとって自己の基盤は備後以外に無く、その喪失は自身の没落を意味したからである。

しかし、実際にその先陣が備後に入国したのは、翌文明三年四月十日のことで、是豊自身が備後坪生（福山市坪生町）に着陣したのは更に遅れて同月十六日の事であつた（三浦家文書）。これは備後の沿岸部が既に西軍方に押さえられており、東軍優勢の東隣備中から陸路を通つて備後に入るほかすべが無かつたためであろう。

備後に入つた是豊は直ちに草土（福山市草戸町）に進んで西軍方の構えた城を攻め落とすと共に、鞆（福山市鞆町）に本陣を移し、西軍方追いつ落としたため活動を開始する（同上）。

是豊の備後入国のことを『渡辺先祖覚書』は「是豊様山名御家督越御むほんいよいよ御はたしなく」と述べている。是豊にとって戦いは、中央の戦局には関係無く、『山名御家督』を懸けた自分自身の戦いであつたのである。

## 柏村の合戦

入国した是豊が最初に攻撃目標としたのは備後最大の勢力を誇つた宮下野守（教元）であつた。宮下野守の向背については今まで東軍方に応じたとする説が主流を占めていたが、先に論証したようにそれは誤りである。従来の説は、備後の応仁の乱を南北朝人衆の抗争と位置付けているが事態はそれほど単純ではない。旧来の説を採つても宮下野守（惣領家）の勢力は備後南部の深津郡から備北の奴可郡（現比婆郡東半）に及んでおり、この図式には当てはまらない。

『渡辺先祖覚書』によると、是豊の攻勢に直面した宮一族は、惣領の下野守を中心として山間の小盆地「柏村」に立て籠もり、この攻撃を凌ぐうとした。

「柏村」は、現在の芦品郡新市町下安井・柏にあたり、備南の名峰蛇円山から芦田川に向かって伸びた一支峰中の窪地で、周りを百メートル前後の尾根で囲まれ、東西南北に小径が通じ、大軍を迎え撃つには恰好の場所である。

是豊と宮一族の戦いは、『渡辺先祖覚書』によると、足掛け三年間続いた。その詳細は知り得ないが、同覚書によると、是豊被官の渡辺信濃守家は「一宮りんそう合戦」や「つつみの城没落」の合戦で戦功を挙げている。「りんそう」（新市町宮内）や「つつみの城」（深安郡神辺町上竹田）は今日でも地名が残っており、戦いは、柏村を中心とした神辺平野全域を舞台として行われたものと思われる。また、同覚書によると、是豊方には備前の松田氏、備中の庄元資の軍勢も加わっており、『洞松寺文書』によると、庄元資の弟資長は文明三年十一月二十日、備後柏村で討死している。このことは、是豊の配下に備後の有力な国人衆が加わっていない事と合わせて、備後の『応仁の乱』が東西両軍の争いと言うよりも、是豊と国人衆という、守護対在地の豪族の主導権争いであったことを明確に示すものである。つまり、是豊の戦いは、自分自身の権力確立の戦いであったと共に、以後百年続く戦国動乱で誰が備後の支配者であるかを占う上で、大きな意味をもっていたのである。

是豊の初戦は、国人衆の敗北で終わった。『渡辺先祖覚書』によると、

柏村に追い詰められた宮一族は、「下野殿を始めとして悉腹を御切」、備後国は悉く山名是豊の「御下知」に従ったという。

宮下野守（教元）の敗北は事実と思われる。宮氏の氏寺徳雲寺（比婆郡東城町）の記録によると、宮教元は「備後柏村」で討死したとあり、このことを裏付けている。

しかし、戦いの帰趨はこれで決まったわけではない、備北甲山城（庄原市本郷）には、備後西軍の主力、山内豊成が、和智・柚谷・田総氏などの国人衆と共に、是豊の軍勢を阻止すべく、満を持して待ち構えていたのである。

### 甲山城の戦い

山内首藤氏の拠点甲山城跡は、庄原市本郷の田園地帯の北側に、低い丘陵の上に塔を立てたように聳えている。鎌倉時代末期、西遷地頭の一員としてここ地毘庄に下向した山内通資は、初め庄内最北端の比婆郡高野町に郡山城を築いて本拠とするが、後に南下して地毘庄の中心甲山に城地を求め本拠を移した。ちなみに、地毘庄の庄名は、奈良時代、行基が甲山に来て、山中の栗の木から地蔵、毘沙門の像を刻み、山内の観音堂に安置したの由来し、地蔵の「地」と毘沙門の「毘」を採って「地毘庄」と号したという。

それはともかくとして、以来山内首藤氏は備北の国人衆として勢力を伸ばし、応仁の大乱では、備後西軍の主力として、是豊排撃の先鋒として活動したことは先に述べた通りである。

『渡辺先祖覚書』によれば、二ヶ年に互ったとされるこの戦いは、先の

柏村の合戦以上に、守護対国人衆という戦いの図式を鮮明にする。すなわち、宮氏を屈服させたとはいえ是豊には国内の有力国人衆は殆ど味方せず、依然としてその頼むところは渡辺・栗原という土豪層と隣国の東軍方諸将のみという状態が続くのである。それに対して甲山城に籠ったのは、今日判るのみでも和智氏・柚谷氏・田総氏などの有力国人衆を網羅し（田総文書・閩閩録など）、他の有力国人衆三吉氏、江田氏なども各々居城に籠って是豊に抗戦しており、形勢は正に守護にたいする「国人一揆」の様相を呈していた。

## 是豊の没落

甲山城を攻撃する是豊の足元は意外な方向から崩れ始めた。是豊の有力な味方は国内に無く、隣国の東軍方の援助を仰いで来たことは先に述べた。なかでも、西隣安芸の有力国人衆沼田小早川氏は是豊にとって杖とも柱とも頼む有力な味方であった。にも拘らず是豊は同氏の危機を救うことが出来なかつたのである。

沼田小早川氏の本拠高山城は、文明五年九月以来同氏の有力な庶家である竹原小早川氏を初めとする西軍方の包囲攻撃を受けていたが、是豊の必死の救援も空しく、文明七年四月十二日、和睦、開城したのである。有力な味方を救援出来なかつたことは、是豊にとって大きな痛手であった。それは是豊の武将としての人望を失墜させる事にもなつたし、西の防波堤を失つた是豊は、その本拠備南を敵の攻撃に晒すことになつたのである。また、この和睦交渉には東軍方の庄元資も加わっているこ

とから分かるように、味方国人衆のなかには東西両軍の首領細川政元、山名政豊の講和（文明六年四月）に刺激されて和平への機運が高まりつつあり、一人野心的な是豊は周囲から孤立しつつあつたのである。

是豊軍の崩壊は急激なものであつた。隣国安芸の毛利豊元の軍勢が、同じく西軍方の江田氏の籠る旗返城（三次市三若町）を攻撃中の是豊の子息山名七郎・小早川氏の軍勢を切り崩し、江田繁ヶ峰（三次市向江田町）に陣を移すと、是豊軍の敗走が始まつた。是豊はこの背後からの脅威を取り除くことができず、甲山城に籠る西軍方の総反撃を受けて石見の国に逃走したのである（毛利家文書・渡辺先祖覚書）。

## 乱の意味するもの

結果として備後の応仁の乱は、西軍方に結集した国人衆の勝利に終わった。しかし、これで戦国備後の主導権が国人衆の側に帰してしまつた訳では決してない。依然として守護の權威は生きており、乱の後始末は宗全の跡を継いだ山名政豊の手によって行われたのである（平賀家文書）。

だが、山内氏を初めとする国人衆の台頭はだれの目にも明らかである。政豊は国人衆の支持によつて権力を手にしたのであり、その支持無くしては何事もなし得なかつた。すなわち、それまで守護の側にあつた政局の主導権が国人側に移る契機として、応仁の乱は備後でも大きな意味を持つていたのである。

（注）特に断らない場合、事実の出典は「福山市史」上巻と「広島県史」通史編中世によつた。